

避難している子どもたちの学びに貢献

～「学校図書館げんきプロジェクト」熊町小学校&大野小学校取材原稿

○町全体で取り組んできた「調べ学習」

日本生協連が「つながろうCO・OPアクションくらし応援募金」の一環として支援する「学校図書館げんきプロジェクト」。実際に寄贈された本は、どのように活用されているのでしょうか。福島県大熊町から会津若松市に避難している大熊町立熊町小学校と大野小学校を訪れました。

大熊町は全域が警戒区域となり、すべての住民が町外で避難生活をおくっています。熊町小学校（同96人）と大野小学校（児童数138人）は会津若松市の旧・河東第三小学校の校舎を合同で利用。児童たちが日々学んでいます。

日当たりのよい校舎2階の図書室をのぞくと、近ごろ珍しい畳敷きでした。司書の志賀潔子さんは「利用は、2時限目と3時限目の休み時間（15分間）と昼休みが中心になります」と教えてくれました。畳なので児童たちは思い思いの姿勢で本を読んでいます。コロコロと寝転ぶ子、本を見ながら絵を描く子、また生徒同士で読み聞かせをするグループもあるそうです。

「生徒は授業中も本を探しに来るんですよ」と言う志賀さん。実は、大熊町は教育にとっても熱心で、「調べ学習」にも力を注いできました。調べ学習とは、ある課題について児童が図書館を利用し、聞き取り調査なども含めてまとめる総合学習の1つです。

大野小学校の教諭、三本杉文子さんは「学力の基礎は読書です。図書室を使っていろんなことを調べながらまとめることは、町全体で取り組んでいました」と話します。とにかく本をたくさん読むこと、さらに本で調べてまとめる力をつけようと努めてきたそうです。

震災前、大野小学校には教室4つ分の広さをもつ図書館ができたばかりでした。そのきっかけは、町長や教育長を招いて行なった「こども議会」での児童の発言です。

「ある児童が『うちの小学校の図書室は狭くて混むので、もっと広い図書室が欲しい』と言ったのです。それで2階建ての多目的ホール兼図書館ができました」（三本杉さん）

このエピソードにも大熊町の教育に対する姿勢が表れています。また、震災がなければ、熊町小学校にも新しい図書館ができる予定でした。熊町小学校教諭の半谷久恵さんは「2012年度には建つはずでした。設計図は完成していたのです」と話します。

また、各学校には必ず司書がいて、「こういう本が入ったよ」「こ



授業の合間や昼休み、生徒たちは畳敷きの図書室で本を読む。



大野小学校に寄贈された百科事典や参考書。これらは児童の「調べ学習」に日々使われている。

のテーマを調べるならこの本がいいんじゃない？」と生徒にアドバイスしていたそうです。本を利用した調べ学習に、町ぐるみで取り組んでいた様子が分かります。

授業に必要な図書を両校で選定

大熊町は図書の購入予算も多かったそうです。だからこそ避難後はずいぶん不便だったはずですが。三本杉さんと半谷さんが「学校図書館げんきプロジェクト」を知ったのは、郡山市に避難している大熊町の書店員からの情報でした。

三本杉さんは「必要としている本を寄贈してくれる取り組みがあると教えてもらいました。読み物となる本は寄付である程度そろっていたので、両校の先生たちに調べ学習に必要な本を聞いて、リストをつくりました」と振り返ります。図書室は2つの小学校で一緒に使っていますので、両校の希望をくみとったのです。

大野小学校には第一次寄贈校として100万円分の図書が贈られました。希望した本は、理科と社会、環境、国語が中心ですが、これらはすべて関連性があるのです。

たとえば国語の教科書で「動物の赤ちゃん」の話が出てくると、「じゃ

あ、この動物以外の赤ちゃんはどうやって育つんだろう」と別の本で調べてまとめるのだそうです。

三本杉さんは「国語の時間に理科の本を調べることもあるのです」と教えてくれました。また、低学年の児童は「この車はこういう働きをするんだよ」という「自動車しらべ」を行ないます。「授業の一環として、本を使って自分たちで『自動車図鑑』をつくるんですよ」と言う半谷さん。

そこで大切なのは、授業中に1人1冊ずつ同じ本が行きわたること。「お願いした冊数が届いたので、動物や自動車の本は1クラス分そろいました」と話す半谷さん。ほかの子が読み終わるのを待つことは、もうなくなったそうです。

熊町小学校は第二次の寄贈校となりました。2013年1月にリストを提出して、到着を心待ちにしています。半谷さんは「今回は調べ学習以外にも、読み物や新刊も希望しました」と明るく話してくれました。

「学校図書館げんきプロジェクト」の寄贈は今後も続きます。大熊町には読書部会が定めた図書リストがあり、次はそれを希望したいと三本杉さんは言います。「きみへのおくりもの」と名付けられた



左から、「学校図書館げんきプロジェクト」に提出する図書リストをまとめた大野小学校の三本杉文子先生と熊町小学校の半谷久恵先生、図書室の運営に携わる司書の志賀潔子さん。



このリストは、小学校 1～2 年生、3～4 年生、5～6 年生で各 30 冊ずつ、中学校 1～3 年生で 50 冊を「これだけは読みましょう」と推薦しているものです。リストに載っている本は数冊ずつ図書室に常備していたそうです。

「でも、これまでにたくさん贈っていただいたので、授業で困ることはなくなりましたよ」と言う三本杉さん。「授業でどんどん使っています。助かっています」と語る半谷さん。お二人に、全国の生協からの寄付をもとに日本生協連が拠出した金額を伝えると「そんなに！ ありがたいことです」とおっしゃっていました。

全町避難という困難な状況にもかかわらず、町の将来を支える子どもたちの学力を伸ばすため、図書室を使った調べ学習に力を入れる大野小学校と熊町小学校の先生たち。日本生協連が支援する「学校図書館げんきプロジェクト」が、その一助となっていることをうれしく思いました。